

令和7年度 福井県立美方高等学校 学校評価書

項目	重点目標	具体的取組み	成果と課題	改善策・向上策
中高一貫教育	・探究活動を軸にした教育活動の連携促進 ・連携生(中・高)の先進的な学びの場の設定	①異校種交流による探究活動充実へ向けた教育課程の検討。 目標:学校間交流活動15回以上(報告会・協働研究含む)	昨年度に引き続き、英語と数学の乗り入れ授業は2月まで行い、発展的学習や先取り学習を積極的にすすめている。また3月に本校で中3連携生徒に対し4回の特別授業(英語・数学)を実施した。このように先取り学習によって連携生徒の高校1年生での英数の高1ギャップをなくし、ゆとりを持った授業ができるように工夫をしている。このゆとりを利用して探究学習を推進し、校外研修や地元中学校、および美浜町小学校との探究学習を通じた連携を推し進めており、連携クラスの一つの魅力としている。 研究委員会は、今年度6月に両町教育長、両町小学校代表校長、高校教育課担当等にご出席いただき、取組み・予算面等について理解をいただくことができた。3月の第2回は昨年同様開催せず資料配付のみとした。 今年度部活動での交流は、吹奏楽部、卓球部、陸上部、剣道部やバレーボール部などで合同練習等を実施できた。	R8年度美方高校1年連携クラス生徒の本校への入学割合は21/45名(47%)で、R7年度の入学割合29/57名(51%)と比較すると微減であった。R4年度以降、高校での連携単独クラス編成をし連携クラスのアドバンテージが明確になったことが本校の特色ある学校づくりにつながっている。そのために本校の連携生徒を学校のリーダーとしても丁寧な指導で育成し、生徒自身が連携生徒であることに満足できるようにしていく。 また、探究学習における連携は、1年Rホーム、2年Tホームを中心に美浜・三方・上中の三中学校と進めている。今後も美方高校の探究学習発表会を中心に、連携中学校の連携生徒に参加してもらった交流や美浜町の小学校との連携も加えながら、探究学習での交流を深めていきたい。
		②国際交流・校外研修・校外発表等、視野を広げる活動の場を設定。 目標:国際交流活動の実践2回以上、校外研修5回以上、校外発表本数のべ50本以上	国際交流活動については、2年Tホームが台湾研修旅行においてB&Sプログラムに参加し、現地大学生と英語で意思疎通を図りながら台北市内でフィールドワークを実施した。英語による直接的なコミュニケーションを通して自己の英語運用能力を確認する機会となり、学習意欲の向上につながった。また、異文化交流を通じて国際的視野を広げることができた。今年初めて連携中生・美方高生・地域のフィリピン人留学生の交流イベントCultureConnectCampを開催し、日本文化体験やトークタイムを通して生活文化の違いや多様性について学ぶことができた。 校外研修や校外発表本数については、十分に目標を達成することができた。特に、校外での発表本数については、昨年同様に三方中、美浜中および上中に連携生を派遣して研修内容の発表を行うなど、探究学習以外の連携も含むことができた。	今年度同様、先取り授業の利点を生かし、余裕をもって探究学習および研修内容の発表など、連携生徒自身による交流活動を行い、生徒の生の声を連携する三中学校に届けていきながら、連携クラスのアピールをしていく。 R6年度に初めて実施できた海外研修旅行を参考に、より生徒の国際感覚を養うことができる交流活動の模索や相手先との交流の工夫をしていきたい。
教育課程 学習指導	○主体的・対話的で深い学びへ向けた授業改善の促進	観点別評価方法の再検討や教材の工夫等の協議を通して、自身の授業を省察 目標:「授業内容を理解できる」とする生徒の割合80%以上	授業における観点別評価の構築、各教科で評価方法の研究を行い、生徒への指導を「十分」または「おおむね」行ったとする教員は97%(昨年96%)であった。外部講師を招いたり、外部の中高教員に来ていただいたりして授業研究を行った。また、観点別ABC評価の研究も各教科で継続して工夫しており、観点別評価から評点への総括の仕方を、よりシンプルに改善した。 授業内容を「ほとんど」または「おおむね」理解できているとした生徒は95%で昨年より3%増加した。目標(80%)は達成したが、授業内容を理解度できない生徒に対して、より個々を大切に丁寧な支援を工夫していく。	新学習指導要領で言及されている「対話的で深い学び」の実現や新しい入試に関する研究をさらに進め、効果的に学習内容、学習方法が提示できるよう、各教科、進路支援部等との連携を強化していきたい。外部講師を招聘しての授業研究だけでなく、教員相互の授業参観を積極的に行って授業改善を行い、また、教科横断型の授業も模索して教育効果を上げていくようにしたい。 授業を丁寧に行うことはもちろんのこと、理解度が低い生徒および習熟度の高い生徒の個別支援を継続することが重要である。生徒一人ひとりの能力に応じた課題提示を行ったり、生徒自身に振り返りをさせ、それを教員が把握したりして、個別に支援していく必要がより一層求められる。
	○生徒個々の理解度に応じた学習支援体制の強化	学習アプリの有効活用、自主学習機会の設定 目標:学習アプリ等を活用した実践3回以上	本校の学力向上の取り組みについて、87%の保護者が「満足」「おおむね満足」と答えており目標は達成した。 ICT機器を用いて授業を実施したり、課題等を提示(GoogleClassroom、スタディサプリ等の活用を含む)することが「十分」または「おおむね」できた教員97%(昨年96%)と、目標を達成した。より一層研究を進めていきたい。 次に、タブレット等を授業や探究活動および自主学習で活用できた生徒は、「十分」、「おおむね」活用できた生徒が95%(昨年94%)で目標は達成した。個々の学習支援を丁寧に行うことを目指してICTをうまく活用しながら、生徒の学習支援をさらに構築していくことが必要である。	タブレットの活用が進み、生徒の授業への取り組みがより主体的になってきている。教員側の活用も含めて、より一層の研究が必要である。観点別評価と関連して、「知識・技能」を問う課題と「思考力・判断力・表現力」を問う課題のバランスを考えて設定をすることが大切である。より深い学びにつながる課題の設定に努めていきたい。
	・ICT活用による業務の効率化を図る	ICT環境の整備・利用促進を図る。 目標:教職員の情報環境に対する満足度80%以上	ICT環境(ハード・ソフト両面)については、「満足」、「おおむね満足」とした教員が85%(昨年88%)と、目標を達成した。一方で、機材等の故障等への対応に対する予算が確保されにくい現状があるのが課題である。	現在あるICT環境の満足度が高いという結果に甘んじることなく、より一層改善できる点がないかを考えていく必要がある。

生徒支援	<p>・基本的な生活習慣の確立を図る</p>	<p>①時間管理の習慣作りに努めさせる。</p> <p>目標:保護者の生徒の生活習慣に対する満足度80%以上。</p>	<p>基本的な生活習慣のうち、規則正しい生活を送れているかという点について、「送っている」または「おおむね送っている」とする割合が、教職員から生徒を見た場合は82%、生徒が自分を評価した場合は92%、保護者から生徒を見た場合は78%となった(目標値80%以上)。保護者から見た割合は目標を達成することができなかったが、前年度とほぼ同水準の結果となった。このように、学校や家庭での規則正しい生活を送れている背景には、各家庭における親子の関わりが質・量ともに高まっていることが要因として考えられる。今後も引き続き、時間管理や日々の健康管理といった基本的な生活習慣の定着・向上に向けて、学校と家庭が連携して取り組んでいきたい。</p>	<p>「規則正しい生活を送れていない」と回答した保護者が22%いたことから、子どもの生活状況に対して何らかの不安や心配を抱えている家庭が一定数あると考えられる。生活習慣が乱れる要因は多岐にわたるが、その一因としてスマートフォンの利用時間が影響している可能性がある。改善策・向上策としては、スマートフォンの利用が生活習慣に及ぼす影響について家庭と共通理解を図り、使用時間や就寝前の利用に関するルールづくりを支援することが重要である。また、メディア利用に伴う情報リテラシーの向上を図る教育や健康教育を通して、子ども自身が生活を振り返り改善につなげられるような取組を推進する。さらに、学校と家庭が連携し、生活リズムを整えるための環境づくりに協力して取り組むことで、基本的な生活習慣の定着を図っていきたい。</p>
	<p>・学校行事や部活動を推進する</p>	<p>②学校行事に主体的に取り組ませる。</p> <p>目標:生徒の学校行事への満足度80%以上。</p>	<p>学校行事に関しては、「満足している」または「おおむね満足している」生徒が、全体で95%(1年生の93%、2年生の97%、3年生は96%)と昨年度と変わらず大変高い数値であった。従来以上にそれぞれの行事の内容が効率的にコンパクト化され、生徒自身が主体的に計画し、積極的に参加し、無駄なく大いに楽しめた結果であったと思われる。今後も、生徒の主体性を生かした行事運営をサポートしていきたい。</p>	<p>すべての学年で満足度が昨年度と同様に高いことから、生徒の学校行事への期待が大きく、積極的に参加し、達成感が得られたことがうかがえる。特に学校祭においては、熱中症対策の観点からも、内容を精選し無駄がなく効率的なものになるよう、企画・立案する姿が確認できた。生徒会執行部員などをリーダーとしながらも、各自が自分のこととして、主体的に参加し、将来の自立した生き方の基礎となるような体験ができるよう支援していきたい。その意味でも、従来の学校行事の内容や形態を、生徒の意見を踏まえながら改良、刷新していきたい。</p>
	<p>・心身の健康および安全や相談体制の充実</p>	<p>③心のLTや保健委員会活動などを充実させ、健康管理意識を高める。</p> <p>目標:生徒の健康管理意識が高まった割合80%以上。</p>	<p>心のLT(性についての講演)や「保健だより」(感染症対策・熱中症対策)等を通して心身の健康について関心が「大いに高まった」または「おおむね高まった」とする回答が全生徒の91%と昨年の87%を上回り、目標(80%)も達成することができた。</p> <p>「心のLT(性についての講演)」では、たきざわ助産院の助産師から性についての話を聞き、命の大切さや自分自身と相手を大切にすることの意味を、改めて考えるきっかけとなった。</p> <p>感染症対策・熱中症対策については、状況に合わせて、「保健だより」を発行している。</p> <p>健康管理については、健康に気をつけて生活することが「常にできている」、または「おおむねできている」とする回答が、全生徒の91%(昨年度90%)と、目標値(80%)を大きく上回った。</p>	<p>「心のLT」や「保健だより」等を通して心身の健康に関心を持つ生徒の割合は、90%を超え、目標を大きく上回った。今年度から保健だよりを教室掲示ではなく、Googleクラスルームで配信し、全生徒が目を通すことができるよう工夫した。連絡システムも活用しながら、保護者への発信にも努めていきたい。</p> <p>今年度はインフルエンザが例年より早く流行し、12月には新型コロナによる学級閉鎖も行った。生徒・教職員で情報と危機意識を共有して対応した。一斉指導ではなく、個々の生徒が、感染状況と活動場面に応じた対応ができるような支援が必要である。生徒達が自分の健康を自分で守る意識が高まるよう、わかりやすい情報提供に努める。感染症情報を日々更新し、生徒・教職員・保護者と学校全体で共有し、教育活動と感染予防を両立できるよう支援していく。</p> <p>来年度もST・LTの時間や「総合的な探究の時間」を利用し、自分の心身の健康や命について考える時間を確保していく。また、学年会・体育科・他部署と連携を密にして、効果的な内容を精選し支援を進める。</p>
	<p>④整美・保健委員会の活動や清掃活動を充実させ、安全意識の向上に努める。</p> <p>目標:生徒・教職員の取組に対する満足度80%以上</p>	<p>教職員の、担当場所の安全管理について「危険等を予測し、徹底して点検している」または「危機等を意識し、点検している」が昨年度に引き続き100%であり、目標(80%)を達成した。</p> <p>今年度も教員対象の安全点検(月1回)を行っている。それらの情報をもとに、危険箇所・不良箇所の発見・改善につなげた。また、3学期には整美委員会によって生徒対象の安全点検を実施する予定である。</p>	<p>全教職員の協力で、清掃活動が円滑に行われている。さらに、生徒が自ら主体的に清掃活動や美化活動に取り組む姿勢を育てる支援が必要である。まずは日々の清掃活動で根気強い支援を行っていく。ホームごとの「奉仕LT」は主体的に取り組む態度、奉仕の心を育てる場となっている。今後もこのような整美・保健委員会の活動を充実させて、生徒が清掃活動に主体的に取り組む成長の場を作っていく。</p>	
	<p>⑤快適度・いじめアンケートを生徒理解に役立てる。</p> <p>目標:教員における、アンケートの有効性に対する満足度80%以上</p>	<p>「役立っている」・「おおむね役立っている」が合わせて90%となり、目標の80%を大きく上回る結果が得られている。月一回の実施ではあるが、生徒の現在の様子を知り、生徒への声かけや面談のきっかけになっていると考えられる。また、生徒の本音を語ることへの抵抗を少しでもなくし、アンケート結果がうまく生かされるよう、質問内容を吟味し改良した結果であると考えられる。担任・副担任が、アンケート結果を基に生徒との直接的なかわり合いを増やすとできるよう、内容や実施時期についても検討し、今後も生徒各自の内面の変化や周囲の人との関わり方について、敏感に気づき対処できるよう工夫していきたい。</p>	<p>昨年度に続き、アンケートの内容や実施時期を変えたことで、生徒の内面や現在抱えている問題により近づくことができたことを成果と考えたい。このアンケートに悩みを書くことができ、スクールカウンセラーと連携することができた生徒がいたことも成果としてあげられる。今後も生徒の実態を把握しながら、臨機応変に内容や時期を工夫しながら調査を続けていきたい。また、担任の意見や要望を踏まえながら、アンケート以外の調査や生徒の実態を把握する方法を模索したい。同時に、生徒との直接的な対話の時間が確保できるよう、校務などの効率化にも努力したい。</p>	

生徒支援		<p>⑥「面接週間」を生徒理解に役立てる。</p> <p>目標:教職員における、面接週間の有効性に対する満足度80%以上</p>	<p>「役立っている」・「おおむね役立っている」が94%となり、目標の80%を大きく上回る結果が得られた。生徒の抱える問題は年々複雑になり、相談内容も多様化しており、個別に対応しアドバイスすることは困難を極めている。そのような中、根気よく直接生徒と対面することで、信頼関係を構築しながら、生徒一人ひとりにとってより効果的な面接ができるよう、今後も時間の確保と相談体制の確立に努力していきたい。</p>	<p>担任一人が問題を抱え込まないように、また、生徒への助言が偏らないよう、プライベートを確保しながら、学年や学校全体でサポートできる体制を確立したり、面接がより効果的に実施したりできるよう、教職員を対象とした教育相談研修会を今後も継続して実施していきたい。</p>
進路支援	<p>・キャリア教育を推進し明確な進路目標を持たせ、個々の進路実現に努めさせる</p>	<p>①進路行事を通じて職業観の育成と進路目標の明確化を図る。</p> <p>目標:「進路目標を持てた」割合85%以上</p> <p>:進路指導の取り組みに対する生徒・保護者・教職員の満足度90%以上</p>	<p>担任が「ホームの80%以上の生徒に学年に応じた進路目標を持たせることができた」と答えた割合は84%(前年71%)であり、前年度を大きく上回った。また、生徒が「明確な進路目標を持つことができた」または「明確ではないが進路目標を持つことができた」と答えた割合は89%(前年83%)となり、進路意識の向上が着実に見られた。</p> <p>一方で、保護者が「子どもが明確な進路目標を持っている」または「明確ではないが進路目標を持っている」と答えた割合は68%(前年83%)にとどまり、前年度を下回る結果となった。目標としている85%には到達しておらず、生徒の自己認識と保護者の受け止め方との間に課題が残る結果となった。</p> <p>推薦入試や二次試験等に関する個別指導について、「きめ細かく十分に」または「おおむね十分に行った」と回答した教職員の割合は82%(前年96%)で、前年度より低下した。指導体制や負担感の在り方について、今後検証が必要である。</p> <p>その一方で、進路実現に対して「積極的に」または「おおむね積極的に」取り組んだと自己評価した3年生の割合は94%(前年91%)と増加しており、生徒自身の主体的な進路行動は一層高まっていることがうかがえる。</p>	<p>進路調査にとどまらず、総合的な探究の時間等を活用して、自らの経験や学びと進路とを結び付けて考えさせる取り組みを、引き続き推進していく。その結果、生徒自身の進路目標に対する自己評価は目標値を上回っており、一定の成果が認められる。一方で、保護者の評価は前年度から低下し、目標値には届いていないことから、生徒の進路意識や学校の取り組みが十分に共有されていない可能性がある。今後は、保護者アンケート等を通じて意見を丁寧に収集するとともに、進路行事や個別指導の内容を積極的に発信し、理解を深めてもらう工夫を行いたい。</p> <p>3年生への個別指導については、今年度も学校全体で取り組み、生徒の主体的な進路実現への意欲は高水準を維持している。一方で、教職員側の「指導が十分に行えた」とする評価が前年度を下回っている。今後は、指導体制の整理や情報共有を進め、より効果的かつ継続的な個別指導を実施していく。</p> <p>また、総合型選抜や推薦入試への関心は今後も高まることが予想されるため、志望理由書や活動報告書、小論文等の指導については模試やICTを活用して早期対策を行いたい。</p> <p>3年生への進路支援はおおむね目標を達成しているが、低学年のうちから進路を「自分事」として捉えられるよう、探究活動や進路行事を通じた段階的な支援の充実を図っていききたい。</p>
	<p>・自ら課題を発見し主体的協働的に探究する力の育成を図る</p>	<p>②総合的な探究の時間の指導を充実させる。</p> <p>目標:生徒・教職員の満足度90%以上</p>	<p>探究活動に「積極的に」または「おおむね積極的に」取り組んだと回答した1・2年生の割合は95%であり、昨年度に引き続き高い水準を維持している。各学年において、生徒は自らの興味・関心に基づいて課題を設定し、主体的かつ協働的に探究活動に取り組む様子が見られ、探究的な学びが一定程度定着していることがうかがえる。</p> <p>また、中学生や地域で働く方々、大学教員等の外部講師を招いたり、校内外で成果を発表したりする機会を設けたことは、生徒が自身の探究内容を深め、他者の視点を取り入れて考える上で有効であった。さらに、大学や地域の専門機関との連携を継続し、校外での発表会等に参加する機会を増やしてきたことは、生徒の表現力や課題解決力の向上につながっており、探究学習の質的向上に一定の成果を上げていると考えられる。</p>	<p>探究学習については、生徒の取組状況は高い水準にあるものの、今後さらに学習の質を高めるためには、教員間の連携を一層強化する必要がある。担任・副担任間の情報共有を密にするとともに、学年や分掌を越えた支援体制を整え、学校全体で探究活動を支える仕組みづくりを進めていく。</p> <p>また、発表会直前にまとまった時間を確保する取組は一定の効果を上げているが、今後は年間を見通した計画的な指導を重視し、課題設定、探究の深化、成果のまとめまでを段階的に進められる学習計画を立案していきたい。これにより、生徒が目的意識を持って継続的に探究に取り組めるよう支援し、探究学習のさらなる充実を図っていく。</p>
	<p>・生徒により多くの書物を読ませ、広い視野と豊かな心を育む</p>	<p>③書物に接する機会を増やし、貸し出し冊数の増加を図る。</p>	<p>図書室の蔵書については、生徒の希望や話題性のある図書を積極的に取り入れ、継続的な充実を図っている。また、学校祭や図書まつり等のイベント企画は多くの生徒に利用され、図書室利用の促進につながった。</p> <p>本年度に図書室を5回以上利用した生徒の割合は43%(昨年38%)となり、前年と比較して増加が見られた。図書室の利用機会が着実に広がっていることがうかがえる。一方、「読みたい本が図書室に充実している」と回答した生徒の割合は82%(昨年84%)であり、前年とほぼ同水準の高い満足度を維持している。</p> <p>また、授業・LT・ST等を活用した読書指導について、「十分できた」または「必要に応じてできた」と考えている教職員の割合は71%であった。今後は、教科や学年と連携した読書活動のさらなる工夫を行い、授業等を通じた図書室活用の一層の充実を図っていききたい。</p>	<p>本年度は図書室の利用回数が前年より増加しており、利用促進の取組は一定の成果を上げている。今後は、入学当初の図書オリエンテーションで図書室利用や読書活動について周知するとともに、授業やLT・ST、図書委員会活動を通して、日常的な読書活動の充実を図っていききたい。</p> <p>蔵書については、生徒の希望や話題性のある本を引き続き取り入れ、高い満足度を維持するとともに、授業等での「おすすめの本」の紹介を通して読書への興味・関心を喚起する。また、図書まつり等のイベント企画や学科・部活動との連携を継続し、各教科と連携した図書室活用を進めることで、図書室利用のさらなる促進を目指していく。</p>

地域連携 保護者連携	PTA、同窓会、 後援会活動の 充実等による学 校教育活動の 周知	①学校からの連絡を全ての保護者が把握できるよう取り組む。 目標:連絡アプリの登録100%	連絡アプリによる通知を、99%の保護者が確認できていることが分かった。残り1%の保護者の援助が必要である。	個別対応により、100%の通知確認を目指す。
		①学校からの連絡を全ての保護者が把握できるよう取り組む。 目標:連絡アプリの有効活用90%以上	内容を確認している保護者のうち、94%の保護者が役に立っていると回答しており、目標を達成している。	保護者がどのような連絡内容を求めているのか、適切な時期にアンケート調査を行い、連絡アプリの有効性をさらに高めたい。
		②PTA広報誌「湖声」を発行し、生徒の様子を保護者に伝える。 目標:「湖声」に対する活動の分かる度80%以上	PTA 広報誌を読んだ保護者の 85% (256/302) が、「生徒の活動の様子が分かる」または「おおむね分かる」を選んでおり、目標を達成している。□ その一方で、保護者の 16% が「受け取っていない」「発行されていなることを知らない」を選んでいる。PTA 広報誌をより多くの保護者に届けたい。	広報誌の発行を連絡アプリで通知して、「受け取っていない」「知らない」という保護者を減らしたい。
		③ホームページ等により学校教育活動を周知する。 目標:「学校の魅力を発信できた」と考える割合80%以上	教員の 88% が美方高校の魅力発信が「できた」を選んでおり、目標を達成した。 「やり方が分からない」を選んでいる教員はいなくなっている。	美方高校の Web サイトや SNS への記事投稿はじめ、連携中学校との交流活動等、あらゆる場面で魅力発信を進めるよう、提案していきたい。
家庭学科	・専門教科に関する知識・技術と探究心を培い、社会の中で生かす実践的態度の育成に努める	①専門教科の学習に関心を持ち、各種検定やコンクールなどに意欲的に取り組ませる。 目標:専門教科の学習や各種検定、コンクールなどに意欲的に取り組んだ生徒が90%以上	専門教科に対して、「意欲的に取り組むことができた」・「おおむね意欲的に取り組むことができた」をあわせて約97%と目標(90%)を上回ることができた。大半の生徒が、専門教科に対して意欲的に取り組んでいることが分かった。	「意欲的に取り組めた」の回答が増えるよう、今後も各科で教材研究や指導方法を工夫していく。また、割合としては少ないものの、「あまり意欲的に取り組むことができなかった」「意欲的に取り組むことができなかった」と回答した生徒もいることから、生徒への個別対応にも力を入れていきたい。
	・学科の特色ある活動を展開し、地域との連携を深める	②校外活動を通して、積極的に地域と関わることでできる生徒を育てる。 目標:地域の行事や校外活動に積極的に取り組んだ生徒が90%以上	校外活動に対して、「積極的に取り組むことができた」・「おおむね積極的に取り組むことができた」をあわせて約95%と目標(90%)を上回ることができた。大半の生徒が、校外活動に対して意欲的に取り組んでいることが分かった。	大半の生徒が積極的に取り組めたとしながらも、わずかではあるが、積極的に取り組めなかった生徒もいる。近年、その割合が増える傾向にあることも危惧している。要因として考えられることとして、入学時の学科への関心が低い生徒が増えていることも事実であり、関心の高い生徒に入学してもらえる工夫と入学後にいかんにかして関心を持たせられるかが課題になってくると考えている。

業務改善	・分掌業務内容のゼロベースでの見直し	各分掌での業務改善提案を定期的に部長間で協議する場を設定	各部署での業務改善の検討機会について、設けることができたと答える教員が79%となった。校務分掌の組み換えから3年が経過し、課題が明確になってきたため、次年度に向けて、校務分掌の組み換えを再度行った。今後の課題としては、業務改善の継続以外にも、部長級の教員が異動してもスムーズに業務を継続できるような中堅・若手教諭の育成がある。	各部長を中心に、業務改善の提案に基づき、改めて見直しを掛けていくとともに、各部会内でもコミュニケーションを密にし、業務の共通理解を図っていく。
	・業務の共有化・情報化促進および学びの個別最適化を図るための研究体制の構築	各種会議のペーパーレス化および個別最適化に向けた協議の促進	<p>昨年度までの職員会議に加え運営委員会でも、修正が必要な月予定などの項目以外、ペーパーレス化ができた。4月当初は、校務システムの変更により大きな混乱が起こったが、ICT担当教員を中心にスムーズに業務を進めることができるようになった。</p> <p>個別最適化に向けた協議は積極的に開催できなかったが、ICTやスタディサプリなどを使って授業の工夫は概ねできていた。</p>	複数のアプリ・アカウントを管理する必要がない「グロースナビ」に移行することで、教職員の業務改善を進めるとともに、それらを利用した個別最適な学びに向けた協議を加速していく。